えちぜん鉄道　旧永平寺口駅舎：旧永平寺口駅舎の概要

越前鉄道永平寺口駅本屋は 1914 年に建てられ、日本と西洋を融合した独特のデザインが 2011 年に登録有形文化財に指定された。

長さ 17 メートル、奥行き 4.5 メートルの平屋建て木造建築である。和風の寄棟屋根は片側のプラットホームからはみ出し、正面入り口は切妻屋根の柱廊になっている。建物の外壁は、下見板とよばれる横長の板を少しずつ重ねた羽目板の一種で覆われ西洋風である。

この建物は大正時代（1912～1926）に西洋の建築技術により、鉄、ガラス、コンクリートなどの材料が日本の建築家によって採用された。明治時代（1868～1912 年）の初期、日本政府はおよそ 200 年の鎖国後に国際交流への新たな関心を示した。 明治の初期には、政府は外国の専門家を雇い、西洋の知識の普及をはかり、彼らの影響力を建築の分野にまで広げた。

永平寺口駅が建設されるころには、西洋の技術の習得はもはや主要都市の高学歴の建築家にだけとは限られていなかった。 永平寺界隈にも西洋の影響が及び、その一例は、柱廊玄関の欄間窓の半円形のガラス窓に見られる。天井にも西洋風の装飾が施され、現在も駅舎の一室に保存されている。

この駅は、乗客が近隣へ向かう別線に乗り換えることができる交通の要衝であったが、永平寺線は 2002 年に運行を停止した。 建物の建設当時、この地域の数路線は京都電燈という電力会社によって管理運営されていた。 京都電燈はもはや存在していないが、そのロゴマーク（斜めの螺旋）は、今も建物の装飾として目にすることができる。現在古い駅舎は、地域住民が休憩したり、勉強したり、イベントを開催したりできるコミュニティセンターとして利用されている。